

論文審査の結果の要旨および担当者

報告番号	※	第	号
------	---	---	---

氏名 THATH Rido

論文題目

Productivity and Efficiency of Rice Production: The
Implication for Poverty Alleviation in Cambodia
(米生産の生産性と効率性:カンボジアの貧困削減への影響)

論文審査担当者

主査	名古屋大学	准教授	新海 尚子
委員	名古屋大学	教授	藤川 清史
委員	名古屋大学	教授	梅村 哲夫

論文審査の結果の要旨

1. 論文の概要と構成

近年、高度経済成長を遂げている東南アジア諸国内でカンボジアも例外にもれず顕著な成長をとげているが、一方約 80%は農村部に住み、農村部における 2011 年度の貧困率は 23.7%と首都部の 1.5%や都市部 16.1%に比べると高い数値になっている。また、農村部で生産される農作物の 80%が米であり、よって米生産の改善が農村部の生活改善および貧困削減につながると思われる。本論文は、カンボジアにおける米生産農家の生産の効率性に着目し、主に次の二つの点について検証している。1 点目は、カンボジアの米生産性および効率性はどのような状況にあり、どのような要素が米生産性や効率性に影響を与えるか、についてであり、もう一点目は、米生産の効率性や生産性がどのくらい貧困削減につながりうるかについてである。

本論文は、全 7 章からなる英語論文である。

第 1 章では、導入、問題提起、背景、使用される手法の概要がまとめられている。

第 2 章では、農業生産性および効率性に関する文献サーベイがなされており、生産性、効率性の定義から始まり、農業生産性と貧困削減や貧困削減のプロセスの関係、また効率性と貧困削減の関係についての今までの研究がまとめられている。

第 3 章では、カンボジアにおける貧困状況について、特に農村部においてどのような所得要素が考えられるか、それらの要素が現在どのような貢献をしているか、について今までの文献をベースに考察している。

第 4 章では、カンボジアの米生産性について、東南アジア、東アジア諸国における米全生産量や 1 ha あたり生産量などと比較し、どのような制約要因があるかを推考している。

第 5 章では、第 1 の主分析として、米生産の効率性に対する主要要素につき、確率的フロンティアモデル (Stochastic Frontier Model) を用い、コブダブラス費用関数をもとに、カンボジアの米生産農家の費用における非効率スコアを計測し、それらの非効率スコアが、どのような生産農家の性格に関連しているかを推計している。その結果、乾季には特に費用非効率性が見出せず、雨季に非効率性が集中していること、特にトンレサップ (Tonle Sap) と山間部でその性格が強く見出されること、非効率性に影響を与える主要な要素としては、1 ha あたりの農業従事者数の増加が非効率性と有意に正の関係にあること、世帯主の年齢は、トンレサップにおいてのみ、非効率性と有意に負の関係にあること、この場合の年齢は一部農業経験数を表していると考えられることを示している。

第 6 章においては、第 2 の主分析として、生産性、特に土地生産性と農業生産性と効率性が米生産農家の貧困とどのような関係性を持つか、貧困関連の既存文献にもとづき一人当たりの総消費、食料消費に着目し、消費がこれらの生産性によりどのような影響をうけているか、について 2009 年のカンボジア社会経済調査をもとに推計している。推計にあたっては、土地生産性および農業生産性において内生性の可能性があるため、操作変数法を用いてカンボジア全国および地域別に各々推計している。その結果、総消費において有意に正の関係をあらわしているものとして、一人当たり非農業所得、また有意に負の関係をあらわしているものとして世帯人数が、地域全体における共通の影響として挙げられる。また沿岸地域においては、労働生産性が総消費と有意に正の関係をしめしており、トンレサップでは、土地生産性と労働生産性双方が総消費と有意に正の関係を示している。非効率性につい

論文審査の結果の要旨

ては、地域全体を網羅するような明らかな統一した関係がみられなかった。食料消費に関しても、非農業所得が有意に正の関係を、世帯人数が有意に負の関係をしめしている。また、土地生産性および労働生産性については、操作変数法を用いて推計した場合には、有意に正の関係をしめしている。地域別にみると、平野部においては、食料消費には生産性は有意ではないが総消費では有意のため、非食料消費に生産性が有意に働いていると思われる。トンレサップにおいては、両生産性とも有意に正の関係を示している。山間部においては、食料消費と生産性の関係は有意であるが負を示している。沿岸部では、労働生産性が有意に正となっている。このように、地域別でみた効率性、特に生産性と総消費と食料消費の関係は異なるものではあるが、国全体でみると生産性の上昇が一人当たり消費を上昇させ、貧困を削減させることを示したものとなっている。

第7章では、本論文でなされている分析および結果の要約と米生産農家の生産性や効率性を向上させるための、また米生産農家の貧困削減をもたらすための政策への示唆が述べられている。

なお、第5章の成果は学術論文として発刊されている。

2. 評価

本論文は、カンボジアの主要作物である米生産における生産性、効率性と貧困削減の関係について一定の貢献をするものである。学位論文として以下のように評価すべき点を含んでいる。

1) カンボジアの米生産について、最新のマイクロデータを用いて効率性レベルについて検証し、また効率性の改善に重要な要素を定量的なモデルで検証し明らかにしている。

2) カンボジアの米生産農家の生産性や効率性が、どのように2つの消費（総消費と食料消費）ではなかった貧困レベルに影響をおよぼすかについて、定量的なモデルをもとに、国全体の分析に加え、地域別に検証し地域別に重要となる要素について明らかにしている。

ただし、本論文は以下のような不十分な点も含んでいる。

1) 米生産の効率性については、人的資産として学校教育ではなかった“世帯主の教育水準”を取り上げ、それと効率性について検証し有意な関係がないことを見いだしているが、“研修の受講”といったより直接的な関係がありそうな変数の検証がみられない。

2) 米生産の土地、および労働生産性、効率性の貧困削減の影響は地域別にみると、あまりはっきりしないものであるが、地域の特性に関連した説明変数がもう少し考慮されてもよかった。

ただ、本論文は、今のところ取得可能な最新のデータをもとに検証した結果を得ているわけであり、博士論文としての価値を損なうものではない。上記の点については、データの改善、より詳細なデータ入手がなされた際の今後の課題であるといえよう。

3. 結論

以上の評価より、本論文は博士（国際開発学）の学位に値するものである。